

次の——線部の漢字の読み方をひらがなで答えなさい。

- 1 養蚕を今に伝える。
- 2 著名な作家の講演を聞く。
- 3 元気に屋外で遊ぶ。
- 4 新しいことを試みる。
- 5 保護者の理解を得る。

次の——線部のカタカナを漢字に直して答えなさい。

- 1 敵のサクリヤクにはまる。
- 2 ラジオがコショウしてしまった。
- 3 イシツブツを届ける。
- 4 不変の真理をキワめる。
- 5 かみの毛をタバねる。

次の文章を読んで後の問いに答えなさい。(ただし、抜き出して答える問題では、句読点、かぎっこ等は一字として数えること。)

光輝は生前に父を亡くし、母と二人で静かに暮らしていた。小学校の五年生まで友達もいとおとなしい光輝であったが、五年生になり初めてできた友人との生活を楽しいと感じていた。そんな時、母の転職により転校しなければならなくなった。しかし、光輝は絶対に転校したくなかったため、ほぼ初対面である祖父の家に一人で引っ越しすることになった。夏休みから祖父の家で過ごすことになった光輝はそこで誕生日を迎えた。光輝の誕生日を祝うため母が祖父の家を訪ねてきた。

1 ずかな宵の口だった。おめでどう、と母さんが言っ、ほくたちはケーキを食べた。このうちには、紅茶なんて洒落たものはなかったから、おじいさんが熱い日本茶をいれてくれた。粉茶で、うんと濃いやつだ。おじいさんは、すぐに売り切れてしまうという小さなケーキを難しい顔で食べながら、濃いお茶を何杯も飲んだ。

ほくは、去年までの誕生日をふと思ひ浮かべた。あのアパートの台所で、やっぱりこうして母さんと向き合っ、いちごのショートケーキを食べた。誕生日には、母さんがほくにたくさん質問をした。勉強のこと、先生のこと、クラスメイトのこと。母さんは必ず半日休みを取っ、ちよつとしたごちそうを作ってくれた。そして、デザートに誕生日のショートケーキ。母さんは丁寧(ていねい)に時間をかけて、紅茶をいれてくれた。

「おいしいね」

ほくはそう言っただけ、すぐに売り切れてしまうという、小さくて四角形の今日のケーキよりも、去年までの大きくて生クリームたっぷりの三角形のショートケーキのほうがおいしいと思っ。

空はようやく夜の色になった。命短いセミはまだまだ力いっぱい鳴いている。ほくはスイカが食べたくなっただけ、ケーキのあとにスイカなんてと言われそうだったから、口に出すのはやめた。

「じゃあ、そろそろ行こうかしら」

母さんがそう言っ、腰を上げた。とたんに空気を抜かれたように、胸がしぼんだ。まだ帰らないでほしいような、一緒にいていきたいような気持ちになっ。ほくの視線に気付いたのか、母さんがほくの肩にそつと手を置いた。

「また、すぐに来るわ。向こうが片付いたら、光輝もいらっしやい」ほくは母さんの顔を見た。へんな笑顔のもう一枚向こう側に、ちゃんとした母さんの顔があるような気がした。今度会うときは、元の母さんの顔に戻ってくれればいいなと願っ。

「お父さん、この子をどうぞよろしく願ひいたします。お世話をかけます」

母さんは深々と頭を下げた。おじいさんは「あ、ああ」と声にならない声を出した。

「じゃあ、行きます」

縁側の置き石には、母さんのサンダルが置いてあっ、昼間はそう思わなかつたけど、夜の庭にはふつりあいに映っ。

母さんはサンダルに足を入れようとしたけど、急に振り返っ、「やっぱり……」と小さな声で言い、きびすを返して足早に仏壇の部屋に行っ。そして、おもむろに手を合わせ、お線香をつけて鈴を鳴らした。おじいさんのように勢いはなかつたけど、やさしい音が響いた。母さんが立ち上がっ、おじいさんに軽く会釈した。おじいさんは、「あ、ああ」と、なんともいえない声を出した。それから、母さんはさつきよりもあわてた様子で縁側へ戻り、すばやくサンダルをはいた。

「じゃあね、光輝。お腹を冷やさないうちにね。なにかあつたらすぐに連絡するのよ」

「うん。母さんも無理しないで、仕事がんばっ」

ほくは、バイバイと手を振っ。

「心配せんでもいいから」

おじいさんが母さんの背中に声をかけた。母さんは驚いたように振り向いて微笑んだようにも見えた。

「いつでも来なさい」おじいさんの言葉に、今度は振り返らないで、母さんはそのまま木戸をくぐっっていった。

母さんが出ていったのを見送ったら、なんだか胸がすうすうした。やつぱり離れているのはさみしい。かといっ、母さんのところに引っ越して転校するなんてやつぱり考えられない。

「なあ、スイカ食べたくないか」

おじいさんがいきなり聞いてきた。

「食べたい」

思わず答えた。なんでわかつたんだろう、と思ひながら。

「なんだか、ああいう甘いものは合わないな。こう、口の中がさっぱりせん」

そう言っておじいさんは庭に出て、井戸水の水場で冷やしているスイカを持ってきた。

「ここで食うか」

「うん」

ほくは台所から、まな板と包丁を取ってきた。おじいさんは慣れた手つきで、まん丸の大きいスイカに包丁を入れた。ぱかっと半分きれいに割れた。真っ赤な果肉はいかにもおいしそうで、黒い種までみずみずしい。

「おいしそう」

「いいスイカだ」

おじいさんはスイカをさらに切って八分の一の半月スイカをほくにくれた。

「こんなに？」

「こんなに食えんか」

「食べられます」

母さんと二人のときは、スーパーで四分の一のスイカを買ってきてそれを何日かけて食べていた。それでも冷蔵庫の中で、持て余していた。

ほくらは、夜の縁側でスイカを食べた。まだまだ熱気が残っていて、スイカの冷たさほくに気持ちよく、汗ばんだ身体にちょうどよかった。

「うまいな」

「甘くておいしい」

食べ頃で熟れていて、とつても甘かった。

「塩持ってきてくれんか」

言われるままに塩の小瓶を渡すと、おじいさんはそれを勢いよくスイカに振りかけた。

「やっぱり塩があつたほうがうまいな」

じゅるっと音をたてて、あんまりおいしそうにおじいさんが塩かけスイカを食べるものだから、ほくも真似してやってみた。なんで果物に塩をかけるのかはさっぱりわからないけど、とりあえずやってみた。

「んーおいしいー」

甘みが引き立って口の中はさっぱりという感じで、それになぜかもつと食べたくなる。

ほくがものほしそうにしていたのか、おじいさんはなにも言わずに、ほくにさつきと同じ分の半月スイカを渡してくれた。男同士という感じがした。おじいさんの真似をして、さりげなくあぐらをかいて、おじいさんのように、さつと高い位置から塩を振ってみた。

まるで、いっぱしの大人になった気分だった。

藍色の空には、まだ星は見えなかったけど、どこかに月が出ているのか、雲の形がいつのまにか、よく見えた。いつのまにか母さんと離れたさみしさは薄れていた。

「おばあさんって、いつ、いたんですか」

本当は「おばあさんはいつ死んだんですか」って聞きたかったけど、

それじゃあ、あんまりだと思って、そう聞いた。

「もうすぐ、ひとまわりだなあ」

おじいさんは、ほくの質問のおかしさを追及しないで、そう答えた。

「ひとまわり？」

「A」が一周するということだ。ばあさんが死んでじきに十二年になる」

十二年。ほくよりも年上だ、と思わずへんな解釈をしてしまった。

ばあさん、というのは、おじいさんの奥さんで、母さんのお母さんということ、ほくのおばあさんということだ。母さんがさつき、なにを迷ったのかは知らないけど、仏壇に手を合わせたのはいいことだと思う。

「ほくもあとで、チンしていいですか」

おじいさんは一瞬きよんとして、それから、

「ああ、頼む」

と言った。あれがめずらしく手を合わせたから、今日はばあさんも喜んどる、と。

あれ、というのは母さんのことだとわかった。

夏の夜風が肌をなでる。

「どれ、わしももうひとつ食べようか」

八分の一のスイカに塩をかけて、おじいさんは食べた。アブラゼミが一匹、貝殻をこすり合わせたような声で鳴きはじめた。闇の中、雲が流れていくが見えた。

「ここはどうだ、慣れたか」

ほくはあんまりにもほんやりとしすぎていて、おじいさんの言葉が、頬をなでる夜風みたいに自然で心地よく一瞬聞き流してしまった。

それからはつとわれに返って

「あ？ ああ、はい！ 慣れました」

と、あわてて答えた。

「そうか」

おじいさんはうなずいて、ほくはほくで、新たな不安にはたと思いつたり、実際不安になっていた。そして、夜を味方に思いきって聞いてみた。

「もしかして、ほくがここに来て、おじいさんは迷惑だったですか」

今の今まで考えもしなかったことだ。ほくはあたりまえに越してきたけど、おじいさんはほくが生まれる前から一人で住んでいたのだし、一人のほうが気が楽なのかもしれない。だけど、今日だって水槽をプレゼントしてくれたし、なによりもカレンダーに誕生日のしるしがしあつたし、朝いちばんで「おめでとう」と言ってくれたし。だから、べつにそんなに迷惑じゃないと思うけど。でも、万が一。

「なにを言うか。そんなこと思つたらん」

おじいさんは少し怒ったように言った。さつきのセミが急に鳴きやんで、突然しずかになった。なんとなくきまり悪いような気がして、ほくはなにか言おうと思ったけど、なにも思いつかなくて黙っていた。

「お前さんが来てくれて家が活気づいてきた。柱も、梁も畳も、廊下も。庭や植木も。みんな喜んどる」

おじいさんがゆっくりとしゃべった。ほくはほつとした。

「それなら、よかったです」

それからおじいさんは「さみしいか」と、聞いてきた。ほくは「さみしくないです」と答えた。おじいさんが横にいるから、もうさみしくなかった。

「水槽、ありがとうございます」

「あ、ああ。新品じゃなくてもすまん」

「あの、えっと、おじいさんはなんで、ほくの誕生日知ってたんですか？」

ほくが質問すると、おじいさんは「そりゃ知ってるさ」と笑った。

おじいさんがマッチで煙草に火をつける。シュツという音とともに火薬みたいな、どこか懐かしい匂いがした。おじいさんが鼻から吹き出す煙草の煙が夜に流れていく。ほくは、煙草の匂いを嗅ぎながら、新しい肉親がこうして隣にいてくれることを、とても頼もしく感じていた。

(椰月美智子「しずかな日々」による)

問一 —— 線部1「宵の口」4「きびすを返して」5「おもむろに」の意味として最も適切なものをそれぞれ次の中から選び、記号で答えなさい。

1 宵の口

ア 夜が明ける直前のころ イ まだ日が暮れないころ

ウ すっかり夜のふけたころ エ 日が暮れて間もないころ

4 きびすを返して

ア 反対の方向に引き返して

イ 借りたものを返そうとして

ウ 思いがけない方に向きを変えて

エ はっと気づいて急に振り返って

5 おもむろに

ア しつかりと イ 突然に

ウ 不意に エ ゆっくりと

問二 Aに入ることばをひらがな二字で答えなさい。

問三 —— 線部7「台所」という熟語の音と訓と同じ組み合わせのものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 果肉 イ 水場 ウ 仕事 エ 半日

問四 —— 線部2「去年までの」思った」とありますが、「ほく」がどのように思った理由を説明したものとして最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア すぐに売り切れてしまうというケーキをわざわざ買ってきてくれたのはうれしいが、一緒に暮らしていたころにはなぜ買ってきてくれなかったのかと不満に思ったから。

イ 母と離れて暮らすようになり初めての誕生日だったが、去年まで感じていた母の温かみのようなものが今日のケーキからは感じられなかったから。

ウ おじいさんと母との三人でケーキを食べることの気まずさを考えると、去年母と二人だけで食べたケーキの方がおいしく感じられたから。

エ 去年までは母が自分のためにちょっとしたごちそうを作ってくれたが、今日は会話も少なくケーキも小さいのもので足りなく感じたから。

問五 —— 線部3「とたんに」しほんだ」とありますが、このときの「ほく」の気持ちを説明したものとして最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 転校をしたくないことから祖父と暮らすことになったが、それでもやはり母がいないことをさみしく感じている。

イ スイカを食べたいという気持ちに母が気付いてくれないことをさみしく感じている。

問六 —— 線部6「母さんは」見えた」とありますが、このときの母を説明したものとして最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア そっけなかった父が自分に対する思いやりをことばにしたことに驚きとうれしさを感じているようである。

イ いつもぶつきらほうで乱暴な父が孫の前ではやさしい祖父を演じていることに驚きとはほえまじさを感じているようである。

ウ 母の仏壇に手を合わせたことで父の態度が変わり、急に気づかいを見せたことに驚きとこっけいさを感じているようである。

エ 父がやさしいことばをかけてくれたことで、息子を安心して預けられると確信しうれしさを感じているようである。

問七 — 線部8「いつのまにか薄れていた」とありますが、その理由を説明したものと最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 半月スイカを二つも食べて満足したり、塩をかけるとおいしいという発見に驚いたりしたから。
- イ 初めてスイカに塩をかけて食べるということをして、あまりのおいしさに感動したから。
- ウ 夜の縁側でおいさんと半月スイカに塩をかけて食べることで、なつかしさを感じたから。
- エ おじいさんの真似をしてスイカを食べることで男同士の感覚を得たり、大人になったように感じたりしたから。

問八 — 線部9「仏壇に『思う』とありますが、その理由を説明したものと最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア おじいさんと暮らすまでは、自分にとっては母だけがすべてだったが、おじいさんとの交流から人に優しくすることの大切さを教わったから。
- イ ほとんど会ったことなかったおじいさんと暮らすことになったから、肉親を心強く思い、大切にしなければならぬと思い始めていたから。
- ウ 母とおじいさんやおばあさんとの間に何があったのかは分からないが、手を合わせることで家族のわだかまりが解消していくと思ったから。

問十 — 線部11「おじいさんは『笑った』とありますが、おじいさんが『ぼく』と一緒に暮らすようになる前から『ぼく』のことを気にかけていたことが分かる箇所を文章中から十九字で抜き出し、その最初の三字で答えなさい。

- 問十一 — 線部12「ぼくは『感じていた』とありますが、このときの『ぼく』の気持ちを説明したものと最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。
- ア 母が以前とは変わってしまった気がしていやげがさしたが、今の暮らしの充実感がそれを忘れさせてくれた。
- イ おじいさんの不器用ではあるが確かな愛情を知るほど、かえって母と離れて暮らすさみしさを感ぜさせた。
- ウ 母が自分の仕事を優先して「ぼく」のことをかえりみないことに失望し、かえっておじいさんの優しさが身にしみた。
- エ 母と離れて暮らすさみしさをより、おじいさんへの信頼感が自分の心を満たすようになった。

問十二 文章中からこの場面における時間の経過を表す一文を抜き出し、その最初の三字で答えなさい。

エ おじいさんやおばあさんがいて、母と父がいて、その上で自分がいるということに不思議な思いがし、子孫が繁栄することはいいことだと思ったから。

問九 — 線部10「お前さんが『喜んどの』とありますが、このときのおじいさんが言いたかったこととして最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 「ぼく」がこの家で暮らすことを多少やっかひに感じていたが、一人で持てあましていた家がにぎやかになりさみしさがまぎれているということ。
- イ 「ぼく」が来てから、毎日がいそがしく張り合いもできたが、孫との家族に対する感覚のちがいにとまどいながら暮らしているということ。
- ウ 妻を亡くし年寄り一人でさみしく暮らしていたが、「ぼく」がこの家に来ることになってから、家が明るくなり幸せを感じているということ。
- エ 母と離れて暮らすことをふびんに思い、「ぼく」のさみしさをまぎらわせるため、家の柱や梁や畳などすべてに愛着を持ってほしいと思っているということ。

問十三 この文章について説明したものと最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 夏の夜空やセミの鳴き声などで「ぼく」の行き場のない境遇を象徴的にえがいている。
- イ 母と離れて暮らす「ぼく」が、おじいさんの愛情を感じながら、新たな生活に向かっていくとする姿をえがいている。
- ウ 濃いお茶の苦さやキーキの甘さ、スイカにかける塩のしょっぱさなどの味覚によって「ぼく」の心情をえがいている。
- エ おじいさんと母の過去のあつれきを中心にして、「ぼく」の成長と家族のきずなをえがいている。
- オ おじいさんと「ぼく」の不思議な共同生活を通し、人とのつながりや前向きに生きる大切さをえがいている。

界である。庶民の知恵である。古くから、どこの国においても、おびただしい数のことわざがあるのは、文字を用いない時代から、人間の思考の整理法は進んでいたことを物語る。

個人の考えをまとめ、整理するに当たっても、人類が歴史の上で行なってきた、ことわざの創出が参考になる。個々の経験、考えたことをそのままの形で記録、保存しようとするれば、煩雑にたえられない。片端から消えてしまい、後に残らない。

一般化して、なるべく、普遍性の高い形にまとめておくと、同類のものが、あとあとその形と照応し、その形式を強化してくれる。つまり、自分だけの「ことわざ」のようなものをこしらえて、それによって、自己の経験と知見、思考を統率させるのである。そうして生まれる「ことわざ」が相互に関連性をもつとき、その人の思考は体系をつくる方向に進む。

そのためには、関心、興味の核をはっきりさせる。その核に凝集する具体的事象、経験を一般的命題へ昇華して、自分だけの「ことわざ」の世界をつくりあげる。このようにすれば、本を読まない人間でも、思考の体系をつくり上げることは十分に可能である。

(外山 滋比古「思考の整理学」による)

問一

□ A・B に入ることばとして最も適切なものをそれぞれ次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 十分に イ ことに
ウ まったく エ むしろ
オ すでに カ めっきり

問二

□ C・E に入ることばとして最も適切なものをそれぞれ次の中から選び、記号で答えなさい。

- C
ア 夜目、遠目、笠の内
イ 高嶺の花
ウ 遠くて近きは男女の仲
エ おかめ八目

E

- ア 機 イ 満
ウ 身 エ 千

* 索然 || おもしろみがなくなってしまうようす。

* 凋落 || 勢いがおとろえること。

* 投機 || 価格の変動を予想し、価格差から利益を得るために行う売買取引。

* 援用 || 自分の説を補強するために他の事例を引用すること。

* 煩雑 || ことがらがこみ入っていてわずらわしいこと。

* 普遍性 || すべてのものに通じる性質。

* 凝集 || 一か所によせ集めること。

問三

線部 1 「日本人に「言われる」とありますが、この理由を説明したものとして最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 外国語へのあこがれは地方出身の方が強かったが、現在は地方でも都会と変わらず外国の情報が得られるから。
イ 自由に海外旅行ができるようになったが、その旅先でなんとなく幻滅を感じるようになったから。
ウ よく分からないから心ひかれていた外国語が、身近になることで色あせて見えるようになったから。
エ 田舎の人間の方が外国語にあこがれる気持ちは強かったが、今では地方でも横文字、カタカナがはらんしているから。

問四

線部 2 「従僕に英雄なし」とありますが、ここでの意味として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 召使いの目から見ると、主人以外の者は偉大な人物には見えてこない。
イ そばにいる召使いからすれば、どんな主人であっても自分にとっての英雄にはかならない。
ウ 召使いがたとえどのような偉業を達成したとしても、英雄にはなれない。
エ どんな英雄でも、その召使いから見ると偉大な人物には見えてこない。

問五 —— 線部3「こういう〜あらわれる」とありますが、その理由を説明したものとして適切でないものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 自分のしていることよりも、他人のしていることの方がよく見えるという人間の習性を理解できていないから。
- イ 様々な人の経験を情報として整理し、定理化されたことわざを知らないから。
- ウ どんなにつらいことでも、我慢強く続けていけば必ず成し遂げられることを知らないから。
- エ 自分の行動を分類しパターン化することで、自分だけのことわざを作ることができていないから。

問六 [] D に入ることばとして最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 石の上にも三年
- イ 他山の石
- ウ 石橋をたたいて渡る
- エ 焼け石に水

問七 —— 線部4「そういう習性」とありますが、この内容を表すことわざを文章中から抜き出し、その最初の三字で答えなさい。

問八 [] F に入ることわざを文章中から抜き出し、その最初の三字で答えなさい。

		音			他	力	A	願	
	半	I	半	F	枝	葉	B	節	
大	胆	J	敵	G	機	D	C		
		通		暗		期	倒		
		神	出	H	没	E	念	発	起
						会			

五 次の[A]〜[J]に入る漢字一字をそれぞれ答えなさい。

問九 —— 線部5「ことわざの創出」とありますが、この過程を表した六字のことばを文章中から抜き出して答えなさい。

問十 —— 線部6「自分だけのことわざの世界」とありますが、これとほぼ同じ内容を表すことばを五字で抜き出して答えなさい。

問十一 この文章の筆者の考え方に合うものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 具体的な事象を一般化し定型化したものがことわざであり、個人の考えをまとめる上でも参考にすべきである。
- イ 古くから人間は思考をことわざとして整理してきたので、学校教育にもっとことわざを取り入れるべきである。
- ウ 対象についてあまりよく分からないほうが心をひかれるものであるから、知ることばはかえって不幸なことである。
- エ 他人のしていることや、他人の持っているものがよく見えるという悪い習性を人間だれもが持っている。

問十二 次にあげたことわざから一つを選び番号を記入し、それにふさわしい具体例を自分の経験をふまえて五十文字以内で答えなさい。

- 1 雨降って地固まる
- 2 後悔先に立たず
- 3 案ずるより産むがやすし

